



金融財政

2007年(平成19年) 4月5日 (木) 第9822号 (購読料金 月額税込み5,565円)

グローバル化の本質

お茶の水女子大学教授 篠塚英子



エコノミスト水野和夫氏から新著「人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか」(日本経済新聞社)を頂戴した。白表紙、黒字タイトルのだけの瀟洒なデザインである。

グローバル化やウオラスティンをも動員した壮大な展開で、刺激的かつ論争的な言説である。この場を借りて一足先に私の読後感を紹介してみたい。本書のエッセンスは次の3点に集約できる。

第1に、グローバル化とは、国境を越えて資本が移動する時代のことだ。「国民国家」の力が衰退し、代わって資本が「帝国」と結び付いた地域(米国、インド、ロシア)の台頭が顕著になる。

第2に、グローバル化の社会では実物経済より金融経済が優位になる。

第3に、グローバル化により、国家単位の均質性が消滅し逆に、国家・個人間の格差が拡大、二極化が到来する。

この3本柱からたらされる結論は何か? それは、格差問題はもはや景気対策では解決できないことを意味する。21世紀の最大の勝者は、国境を越える巨額

資本や「超国家企業」である。その資本移動を決めるものこそ「利子」にほかならない。

超低金利政策に張り付いたままの現在の日本には、勝ち目がないことになろう。このままでは勝ち目がないのだから、日本も熾烈な資本競争に参加するしか選択肢がなさそうだが、何が何のことはない。資本競争に勝った結果は、格差拡大社会の到来だ。これがグローバル化の本質だとして誰の、何のための競争か?

経済学のテキストが語る素朴な経済行為とは、人間が自然、資本、労働の3大生産要素を得て市場経済を行う目的は、ただただ人々の暮らしを支えるためであった。だが現在、資本(マネー)は、生産要素というよりそれ自身が市場商品に変貌してしまった(労働もまたしかり)。これが人々の平穏な社会生活をかき乱す元凶である。ポランニーは半世紀前に労働、土地とともに貨幣の商品市場化を糾弾した(「大転換」原著1957年)。

グローバル経済の本質を見誤るのは、自分が勝ち組に残れると錯覚する人々が、多くの上部組織構造を占めているからではなからうか。

| CONTENTS | |
|---------------------------|---------------------------------|
| ●国際経済 | ●解説 |
| 結束強化策探る生産国、消費国は懸念 | 自動車・電機の大半年、2年連続賃上げ |
| 一急浮上してきたガス版OPEC 構想…………… 2 | 一底上げ進み始めた労働コスト…………… 8 |
| ●BANCO | ●翔んでけスポーツ (谷口源太郎) …………… 11 |
| 国会は遠い (安藤 博) …………… 3 | ●インタビュー |
| ●照一隅 | 一全信組連新理事長の小山嘉昭氏に聞く…………… 12 |
| 中国のテマセク誕生が持つ意味 (丈夫理) …… 5 | ●コラム・コラム (藤原作弥) …………… 15 |
| ●拍子木 | ●日銀・金融政策決定会合 <2月20、21日>…………… 16 |
| 「疑似インフレターゲット」効果 (鈍兎能) 7 | ●政経深層 九段の桜の下で (原田憲一) …… 18 |
| | ●マーケットレーダー (牧野義司) …………… 19 |